



意訳 えさし砂金地の雑記



へるふね (perupnei)



目次

意識 えさし砂金地の雑記

・位置 北見国枝幸砂金地は、頓別川、幌別川に挟まれた七里四方の地で、主な場所は古生層地域のウソタンナイ、ペイチャン、パンケナイの川筋である。

・測地の進歩 北海道5万分1図は小支流を実測しておらず、砂金地では図面と現地が一致しない。20万分1図は砂金出願の根拠だが、5万分の誤りは20万も同じである。測量当時の枝幸は人跡無く、測量士は熊笹や流木を越えて進んだのであり、小支流を実測できなくても仕方がない。実測の必要があれば採金組合が測量士を雇って行えば良い。

・交通 札幌から枝幸へは小樽から稚内経由の船が便利である。船は稚内まで17時間、稚内から枝幸まで6時間で、途中停泊時間を考慮すると、小樽から枝幸まで凡そ一昼夜を要する。陸行では、札幌から旭川まで汽車で6時間、旭川からは馬を使用するが、悪路のため船よりも大変である。

・郵便電信 枝幸と稚内に郵便局がある。札幌からの郵便物は陸便と船便で到着が異なり、冬期は非常な遅延がある。

・気候及び操業時期 枝幸では7～10月の4ヶ月間が砂金に適し、6月以前は融雪のため、10月以降は水が冷たく不便である。冬は市街地と砂金地との交通も途絶えるが、ペイチャンでは寒中にトンネル掘りをすることもある。

・採金者の災害 砂金は鉱山とは違い危険は少ない。ウソタンナイで30余歳の婦人が樹木の下敷きになった話しは有名だが、殺人犯等も希で脚気その他の病気もほとんどない。また、熊は恐れられるが被害を聞いたことが無い。

・地勢 小樽を発し枝幸に近づけば神居岬がある。ここは古生層の山が海に臨むところだが、その前後は緩やかで河口には平野がある。枝幸砂金地は針葉樹や広葉樹の森林が繁茂し緑豊かで秋の紅葉は非常に美しい。谷は急で諸所にニセイ（崖）があるが、肝を冷やすのはペイチャン上流のみである。岩塊もポロヌプリの山頂位で、そこから四方を見れば緑滴る公園に来た様な感じである。

・山 ポロヌプリはウソタンナイ、ペイチャン、パンケナイの水源で、砂金の根源だとし

て金鉱を出願する者もある。私は、北側から2時間半かけて登ったが、樹木はハンノキ、ナナカマド等でハイマツは山頂付近に多い。ウソタンナイ中の川からペイチャンへの通行は容易で、峠は熊笹が踏み分けられている。私が通ったのは、中の川からペイチャン本流、ペイチャン本流からペイチャン小川上流、パンケナイ本流からトイマキ、オチキリからウソタンナイ廣谷事務所である。

・川 川は砂金で姿が変わってしまった。水量は多く水勢もあるが、歩行は楽でニセイはペイチャン上流に多い。岩塊は古生層地に露出しているが、走向きと傾斜が複雑で地質構造の説明は困難である。ペイチャン小川の石英脈は肉眼で見える金粒を有する。

・平地 主な砂金場は中上流部の支流にあり平地は価値が無い。砂金は河床や河岸にあるが、河床と河岸の間に明確な境界は無く、鉱業条例で山側に鉱区を得た人と、砂金法により河床で採金する人が争うのは当然である。

・植物 森林は広大で、針葉樹、広葉樹が密生している。熊笹は繁茂が甚だしく親指の太さで六尺を越えるものもある。山中で迷った時の食料は、ふき、うばゆり、えんこそ等で、川では簡単に魚が捕れる。

・地質 福地氏による地質の概略は次のとおり。

甲、古生層 砂岩・粘板岩・珪岩・石灰岩・輝緑凝灰岩

乙、古火成岩 輝緑岩・閃緑岩・カスリ岩の類

丙、第三紀層 頁岩・砂岩・凝灰岩・子持ち石等

丁、火山岩 安山岩・流紋岩

古生層は地質構造が複雑で、第三紀層が古生層を緩やかに包んでいる。古生層の石英脈は含金があるが、これらが砂金の源である証拠はない。古生層と古火成岩は砂金を有する砂利を構成する。

・黄金の産出 砂金は岩石中の金鉱脈が崩れて川底に沈んだもので、金鉱脈が無くとも母岩が多い時は金粒がある。ペイチャンでは古生層の石英脈に金粒を含み、傍らの崩れに砂金があるので、砂金は石英脈が崩れてできたと考えるのは妥当である。外国では、最初に河岸の砂利を洗い、その後に河岸を掘り、最後は石英脈を掘るが、枝幸はその初期に属する。浜砂金は枝幸から十里ほど離れた「おちしべつ」「といたない」間の海岸にあり、質は良いが微粒で水に浮く性質がある。

・枝幸港と採金組合 札幌から枝幸に来ると、旅館と砂金買入所の多さに驚く。砂金買入所は物品販売所も兼ねており、砂金を高価に買い取る一方、物品の価格を上げて収支を合わせる。このため、東京で枝幸の価格に合わせるのは難しい。廣谷、輪島、長内等の事務所は枝幸と各砂金地にあり、砂金地の事務所には売店もある。枝幸の物価は32年暴騰し、ペイチャンでは白米1升20銭である。

・巡査、監視、山林吏 組合は請願巡査を雇い、事務所には巡査の屯所がある。組合の監視は砂金地を巡って秩序を正し、山林吏が出張して違法者を探索している。これらの機関が密採を防ぎ、紛争を避け、山林の乱伐を防止している。このため、鉱主が利益を得るのは簡単ではないが、役場では鉱主から徴収する特別の税があり、更に採集人からも徴税しようとしている。

・鉱主直営と入場税金法 ウソタンナイ中の川はアメリカ人2人が日本人30人を使う事実上の鉱主直営である。他は、組合が鑑札を売り、鑑札を持った採集人が区域内で採金し、得た砂金は採集人の所得となる。これは、鉱主には簡便だが、掘り荒した跡は合金と無金の砂利が混合し、天然の富源を損するものである。アメリカ人は、河床全体の砂利を洗うので、洗金後の砂利は山になるが、河床の砂金を根底から取り尽くすことができる。税金法は鉱業の趣旨に合わず、鉱主が直営しないのであれば、鉱山局は採取を禁ずるとの話もある。鉱主が直営を嫌うのは砂金の盗難で、防止するのは困難だが、税金法は河床を荒らすので熟考を要する。

・32～33年の採集人数及び産額 32年は採集人7千～1万人と言われ、33年は夏期に3千人の採集人がいた。産額は1匁4円として32年は100万円、33年は5～60万円である。採集人の出身地は最上地方が多く、彼らの得意な流し掘りは所々で見た。

・山林、漁業及び農業に対する砂金業の関係 林業家は森林、水産家は魚族、農業家は農業の保護を願うのは当然だが、砂金業の発展を思えば多少の寛容が必要である。聞けば、森林規則は砂金業を困難にする。樹木の乱伐は厳禁、熊笹刈りも許可を要し、大木倒れても伐採できないので、砂金によって開発された所では規則も寛大にすべきである。また、魚族保護のため産卵時期は砂金を禁じ、33年9月ウソタンナイ、ペイチャンを禁じ、やがてトイマキ、オチキリを除く本支流全部を禁止した。また、砂金の最盛期には、幌別の農民が、砂金のために多数廃業したと聞く。

・採集許可と鉱区の争い 許可を出願する者は、河床か河岸、あるいは両方を占有する

事ができる。しかし、河床と河岸に区画線は無く、増水で河床が広がれば河岸が狭まり、河床に砂利を投入すれば河岸が増える。このため、河岸が甲に属し河床が乙に属するときは争いが起きるのは当然である。これを防止するため、境界に標木を立て、ここから右は水が無くても河床、左は水深くても河岸という様に定めるべきである。次に、例えば甲は某川の下流三里を出願し、乙は甲の上流二里を出願したとする。そして甲の境を支流い、ろの落ち口とし、乙が実測して、い、ろ間は1里、ろ、は間は四里あるとしたらどうなるか。すなわち図面上い、ろ間は三里だが、実測上は一里しかない。そしてろの付近に富金地があれば争いは更に激烈になる。実際この争いのため、甲乙共に採掘を見合わせた例がある。また、地図上甲川は乙川の支流だが実際は連続していない事がある。あるいは甲川の上部としたものが乙川に流れるものがあり地形上の争いは免れない。更に、小支流に名前が無いのは不便と、出願の際第何支流という番号を付す事がある。この結果、廣谷の第何は輪島の第何という様な複雑な関係が生じる。

・平均鉱量、1日の収得、人夫賃 砂利中の砂金含有量、すなわち平均鉱量は調査資料が無いので試掘結果等によるしかない。平均収入は、ウソタンナイで1日40銭の入場料と1升20銭の米代から計算すれば、1匁4円の砂金3分を得なければ利益がない。私を使用した人夫は飯付きで1日50銭だが通常はこれより安価と聞く。また人夫に利益配当する事は勤勉を奨励する策で、利益配当によって砂金窃取を防ぎ勤勉を競うと言う。

・砂金価格と金質 私の所有する砂金標本の価格は次のとおりである。これに東京工科大学の分析表を合わせれば純金1匁5円となるが、ペイチャン等は石喰いが多く例外である。

地名	量	1匁の価格 (円)
1 ウソタンナイばばかりし	1匁	4. 20
2 同エドルシュオマブ	4分	4. 20
3 同中の川	1匁	4. 10
4 同馬道の沢	5分	4. 20
5 同赤井川	1匁	4. 30
6 パンケナイ上流秋山事務所の上	5分	4. 20
7 ペイチャン小川下流	5分	3. 70
8 同金鉱脈の箇所	1分	
9 ペイチャン等の松葉金	2匁	4. 20 (希品)
10 トイマキ	6分	4. 10
11 オチキリ	3分	4. 00
12 ケモマナイ	5分	4. 15
13 ピラカナイ	1分5厘	4. 00
14 オネンカラマブ	1匁	4. 30
15 トイナイオチシベツ間浜	2分5厘	3. 80

砂金を買い入れる際は、砂金を混合して持ち込む者に注意すべきである。また、枝幸でも贗造砂金を売る者がいる。砂金商は試金石で条根を調べ、分析表で金質を調べて売買する。

・副産物 砂金の副産物は、白金、辰砂、砂鉄、クローム鉄鉱等で、馬道の沢では風信子鉱様の紅粒が採れる。辰砂は、オチキリ、ウマミチ、イチャンナイ等、白金はババコロシ、ウマミチ等で産出する。白金は特段の需要無く取り引きされないが、求める者あれば1匁70銭位で売買される。

・主な砂金地 石川氏の図、山口氏の報文、福地氏の記事によれば、主な砂金地はウソタンナイ、ペイチャン、パンケナイに属するが、ケモマナイ、ピラカナイ、オネンカラマップ、赤井川、オチキリ、トイマキ等にも採金者がいる。また、ウバトマナイの石英に金の痕跡がある。

・ウソタンナイ川筋の砂金地 鉱区の大部分は廣谷、輪島事務所に属する。廣谷の事務所は馬道の沢口の便利な場所にあり、ここから半里でアメリカ人の場所がある。また、事務所の上流に中の川があり、下流にババコロシと称する有名な場所がある。中の川とババコロシの間は砂金に富み、エドルシュオマップは二百匁の金塊産地である。ウソタンナイは幅7～8間で水深があり、ババコロシは河岸が広く、アメリカ人場所は川幅が狭い、廣谷事務所には数名の職員がおり、10月は人数が少なかったが、なお200人を扱っていた。事務所のそばに北見屋という売店がある。

・ペイチャン 小川はペイチャン支流で、小川の口に廣谷、輪島、長内の事務所、下流には鹿野の事務所がある。ペイチャンの主な場所は小川の下流で、密採時には、かなり混雑していたと言う。金粒の石英脈はここから20分程のところであり、小川の口に7～8軒の商店や風呂屋がある。ペイチャン上流にニセイがあり、枝幸に通じる道には湿地が多い。

・パンケナイ パンケナイは秋山事務所の鉱区で外国人の手によるが、その占有区域に廣谷に属する所がある。秋山事務所はポンパンケナイとその上流の2箇所にあり、枝幸からポンパンケナイまで行き、上流の事務所からトイマキかウソタンナイに出るのは容易である。

・発見の歴史 福地氏によれば、27年石川某がフレプの砂金を出願、許可を得て砂金業

を始めた。30年末堀川某がパンケナイを出願、31年廣谷、輪島等がウソタンナイを出願し、32年6月許可を得た。これ以前は密採者が公然と採掘していたが、彼等は砂金地開発の先駆者である。枝幸砂金地が最も盛況だったのは32年の夏で、33年雪解け前、詐欺師の誘因により大勢が渡来し、何の成果も無く四散した。同年帝国博物館に砂金を展示、官署大学等もその大塊を手にとって枝幸の評判高く、白仁氏の日本のクロンダイク談は雑誌太陽に投稿された。枝幸砂金地名声のため、日本銀行が砂金地を買収しようとしたが、ある事情によって断念したと言う。金貨本位制と金貨乱出の憂いから学者が北海道に注目するのは当然で、天塩川、名寄川、安平志内川等に政府の探検隊を出し、十分な資金で開発の道を開き、実地を踏まずに鉱区を占有する投機者を制する事を望む。

・主な砂金区域外の掘り跡 砂金地で最初に利益を得るのは密採者で、法律上の罪人ではあるが少数の巡査で制することはできない。組合は砂金地を占有する鉱主ではあるが、採集人に鑑札を売って採金させる。採集人が会えば話題は収量だが、1人として多量と言う者無く収穫少は決まり文句である。密採者が砂金地を開発するのは誠に感謝すべきで、食料道具雑品を背負い、背丈を越える熊笹を越えて進む苦労は大きい、利益は酒色に散在しほとんど残らないと言う。ある人は、密採は一概に禁止すべきでなく、鉱主が着手しない砂金地は密採者を立ち入らせ、またある人は、山間無人の砂金地は森林規則を緩和せよと説き、砂金で知られた地では、少々山林を害することも小事に過ぎないとの事である。

・探検の困難 密採者が川を遡るにも雨後の濁流では進行できず、道路が無い山間を進むのは非常に困難で、北海道で探検に限りがあるのは皆知っている。頓別は小舟でワッカウェンベツまで上ることができるが、幌別は舟を使えるところが少ない。

・枝幸砂金地観察者 白仁氏の記事は大いに参考になり、茂呂氏は金鉱脈の探検に努め、山口監督官補は各鉱区の状況を示した。監督官西尾氏、遠藤氏は鉱業上の事実を明らかにし、道庁は渡辺事業手のみだが、林務、水産、警察等の来観者は多い。宮内省、貴族院、鉱山局の来観者は往復が便利なウソタンナイを見、鉱物学の関係者は河野、石川学士等で大学生も多数来観する。

・枝幸砂金地以外の北見諸川 湧別役場に聞くと湧別川の和田麟吉外3名の許可地で、15人が1日採金したと言う。幌内他にも砂金はあると思うが、採金者を聞かないのは枝幸に人が集まったからではないか。トイナイとオチシベツの海岸で浜砂金を採集するのは前に述べた。トマリの産だという砂金は金4に白金6で、その産地が稚内に近いトマリと言うのは疑わしい。

・天塩国沿岸及び天塩川流域 天塩国沿岸は羽幌の海岸で採集人がある。また、天塩川の上流で22年金粒の存在を確かめた。枝幸の採集人が天塩川の支流トンベツポで採金したと言う。天塩川上流は上川から汽車で行けるので、砂金地開発は近いと言う者もあるがその鉱量は定かでない。

・枝幸の大金塊 枝幸で金塊が採れるのは有名だが、33年10月9日ウソタンナイ支流エドルシュオマブで発見された2百匁余は絶大で、広谷組合が9百何十円で買い取ったと聞く。この大塊に次ぐものは地質学雑誌第70号に示した190匁で、某所で発見されたが不幸にも潰されてしまった。75匁は皇太子殿下に献上、56匁は東京工科大学で買い上げ、これに次ぐものは少なくないと言う。

・福地信世氏の調査 福地氏は大学院生で鉱物生成を研究する理学士だが、33年8月5日から10月13日まで滞在し、砂金の産出状態を明らかにされた。福地氏や私が集めた標本の分析結果を記載する。福地氏は道庁5万分1図を改良し、砂金地における岩石の分布、石英脈の位置等を示された。

・砂金の分析

1、ババコロシ	83.62	13.79
2、エドルシュオマブ	88.93	8.41
3、ウソタンナイ中の川	80.77	14.23
4、ウマミチの沢	79.94	8.16
5、ウソタンナイ赤井川	90.36	6.51
6、パンケナイ上流	85.46	11.27
7、ペイチャン小川	79.32	17.90
8、同金鉱床の箇所	75.61	20.73
9、ペイチャン等松葉金	79.23	19.29
10、トイマキ	86.89	8.25
11、オチキリ	88.10	9.52
12、ケモマナイ	82.50	14.81
13、ピラカナイ	84.90	11.32
14、オネンカラマブ	92.22	2.91
15、トイナイ辺の浜	74.68	18.99
16、石狩国空知川支流ルーマソラチ	79.73	14.86
17、同国夕張川支流ペンケモユーパロ川	82.88	9.72
18、夕張川支流オーマキ沢	84.32	11.44

19、天塩国の浜砂金（ハボロ） 79.33 15.33

石英脈は、第7に金0023銀00156、第8に金000294と銀00146があり、外は金の痕跡と1万分1以下の銀を有する。

- 1、ウソタンナイアメリカ人下
- 2、ウバトマナイ
- 3、エドルシュオマブ
- 4、パンケナイ下の事務所の上
- 5、上の事務所の下
- 6、ウソタンナイアメリカ人下の現場下
- 7、ペイチャン小川の金粒あるもの
- 8、同上の奥露出
- 9、パンケナイ中流

・砂金の寄せ 川で砂金の多い所を寄せと言う。大塚氏の夕張空知報文でも論じられているが、採集人が誇張する様に、砂利の外見で含金の多少を予想するのは簡単ではない。

・採集法 採集法の要点を記す。

第一 ガラス取り 四角い箱の底にガラスを詰め、箱を水面に当てて上から覗き、金粒を発見したら棒の先にもちや樹脂を付け拾い上げる。

第二 かい掘り 道具は鉄棒、カッチャ、つるはし、シャベル、バケツ、ネコ、えびざる、ユリ板を使う。掘る場所の水をかい出しながら進み、掘った砂利はネコ場に運び淘汰する。ネコの上に落ちたものは水流で流されるが、砂金と砂鉄は比重が大きいのでネコの上に止まる。終日これを繰り返した後、ネコの砂金と砂鉄を淘汰し砂金のみを得る。かい掘りで岩盤に達したら、盤をカッチャや鉄棒等で崩しネコ場に運ぶ。これを盤たたきと言う。

第三 流し掘り 用具はかい掘りと同じだが、長柄のカッチャを使うのが違いである。現場と称する区域の大石を除き、採集人が上流に向かって並び、ネコを足の下に据えてえびざるを置く。長柄のカッチャで掬った砂利をえびざるに入れ、手で揺すり淘汰する。かい掘りが砂利を運ぶのに対し、流し掘りは直に行うので便利である。採掘が終われば上流に進み、砂礫で後ろの凹を埋め、更に上流に掘り進める。

第四 陸掘り 陸で行うかい掘りである。始めに水をかい出す必要が無いが、深く掘れば出水することもある。

第五 トンネル掘り 地表を掘る労力を省くため、砂金のある部分をトンネルの様に掘る。この方法はペイチャンで多く行われているが、ウソタンナイで試す人もいる。

第六 樋流し 河段や河床の砂金を採るのに最も適している。川に木樋を設け、樋の中に水を流し、掘った砂利を入れて淘汰する。樋の底に格子を設け、砂金と砂鉄は格子の目に留まる。留まった砂金を淘汰するのはユリ板で、ユリ板で分けられない微粒を水銀で集める人もいる。樋流しはペイチャンで盛んに行われている。

・旧法の大害と鉞主直営 かい掘り、流し掘りは河床で行われるが、1人が砂利をネコに流す量には限りがあり金粒を失う事も多い。樋流しは河床全体の砂利を素早く洗うのに適しており、押し流された砂利は再び手を触れる必要がない。一区域を終われば上流に進み、同じ所を掘り返し掘る必要が無いので、旧法に比べれば雲泥の差がある。今後は鉞主直営で樋流しを行い、河床全体を採掘する事が必要である。

・私が行った試掘 私は、10月15日から10日間、道庁渡部鉄五郎氏と共に人夫を指揮し、ウソタンナイの17箇所を試掘した。しかし、少しの試掘で砂金地全体の鉞量を推定するのは困難である。

第1号 馬道の沢広谷事務所人夫小屋の前

第2号 同事務所警察官出張所の近傍

第3～8号 第2号に近接する斜面

第9号 ウソタンナイ中の川落口対岸

第10号 同エドルシュオマブ落口対岸

第11号 前記出張所傍の山の背

第12号 第9号傍の高台急斜面

第13号 第10号に接する台地

第14号 ウソタンナイ西岸、中の川の落口下1町半

第15号 第14号の上半町

第16号 ウソタンナイ西岸馬道の沢の落口下半町の高台

第17号 ババコロシ中川三郎氏現場向かい中段

これらは、樋流しにより、砂金を有する層や盤の表面を洗った。抗は1坪程なので多数の人夫を入れられず、大石に当たれば縄やモッコで引き上げなければならない。第1号は2日半で13匁6分の大量を得、第2号は半日で1匁を得た。第3～8号は川から10尺～30尺の斜面で少量の砂金のみ、第9号では1日半で1匁程を得たので十分収益を見込める。第11号は河床より百尺以上で含金無く、第12号は河床より20尺の急斜面だが、この高さにも金がある事を証明した。私は、今回の試掘で砂金の法則を発見し、河岸段丘における概要を知ったので、今後大がかりな事業を起こしたいと思う。

・枝幸砂金地以外の新探検についての意見 密採者が枝幸を天下に示した後、資産家が砂金地の主人となり、先達の功ある密採者は巡查に保護され採取を行うに至った。しかし、枝幸は全ての欲望を吸収した訳では無く、正業の暇に探検する者もある。これらの探検者は山中深く探検する資力が無く、天塩川の水源、名寄、安平志内等は政府の探検を要する。探検の時期は7～10月の4ヶ月間とし、5～6人の人夫により、4～50箇所の試掘を行うべきである。天塩川筋も鉞区占領者が分割し、少しも隙間が無いと聞くと、政府が探検すれば空に占領した鉞区が真の鉞区となり、利益十分の業となるだろう。

意識 えさし砂金地の雑記

著 へるふね

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
